

日刊 動労千葉

84.3.28

No1603

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

明確な方針・指導部の決断あれば 不可能を可能にできる

3・25「五割動員」実現した 動労千葉・中野委員長長の決意表明

「3・25全国総決起集会」は、一二、一五〇名とい
うかつてない大結集によって大成功をかちとり、二
期着工を策動する政府・公団・脱落派・革マル等の
反動勢力に打撃を与えた。

そして、動労千葉は組織の未来をかけた「五割動
員」の目標を実現する六三三名の決起をかちとる大
勝利をかちとった。三カ月間にわたる全支部の苦闘
を教訓化し、さらに闘いぬこう。

本号では、3・25集会における中野委員長長の決意
表明を掲載する。

何が正義かを鮮明にした一年間

動労千葉は勤務以外全員参加の方針のもと、勤務、
冠婚葬祭以外のほぼ全員が参加しています。

動労千葉が現地集会に総力をあげて結集したのは
二度目です。

一回目は七八年に、動労「本部」革マルが「三里
塚と一線を画す」との方針を強行した後の9・17に
決起し、「労農連帯のもとに八〇年代闘争をばく進
する」ことを満天下に明らかにしました。

今日の集会は、二期決戦が煮つまるなかで、三里
塚闘争に必ず勝つために動労千葉六三三名を先頭に、
国鉄労働者一〇〇〇名の隊列で結集しました。

3・8分裂攻撃以降一年間の過程は、誰が正しく
どちらが正義なのか、労働者がどう進むべきかをさ
し示したと思います。

本日の結集をみればはつきりしています。

私達は3・8分裂攻撃以降、北原事務局長を中心
とする敷地内農民こそが反対同盟の伝統を受け継ぐ
闘いである、との立場から連帯を表明し、脱落派と
の闘いを強化してきました。

一年間が経過してどうですか。

脱落派は彼等の本首をあらわしています。それは
三里塚だけではありません。労働戦線、その他でも
裏切りぶりは明らかにあります。



1万24余の仲向を前に—中野委員長—

脱落派の中心、第四
インターは国鉄労働戦
線で何をしているのか。
動労から分裂し「鉄
産労」なる組合をつ
った。

彼等は動労を牛耳る
革マルから統制処分を
されながら、「革マル
とは対決しない」とい
うことを明らかにして
分裂したのです。

これは、臨調一行革



600余名が結集して、動労千葉
前段独自決起集会(3/25、11時、成田運転区)

攻撃の嵐の中で、
三里塚とともに
日本の命運を決
める国鉄労働運動をめぐる厳しい闘いから脱落して
いったに他なりません。

このことを見ても、三里塚から脱落していった者
はあらゆる戦線から脱落し、歴史のもくずの中に叩
きこまれるであります。

不可能を可能にする闘いが求められている

動労千葉は「三里塚と国鉄を基軸に中曾根と対決
する労働運動」こそが低迷し何ひとつ闘いを組織で
きえない日本労働運動に対しての重要な立場と確信
して闘ってきました。

今日、春闘集会でも労働者が集まりません。

労働者は闘わない労働組合には結集しないのです。
われわれは、こうした現状を歴史的に総括するなら
ば、何よりも三里塚と連帯し、政治闘争を闘える労
働運動でなければ軍事大国化・改憲、「戦後政治の
総決算」をかかげた中曾根の攻撃とたちむかうこと
はできないのです。

いま、その攻防が三里塚と国鉄にあります。

私達はこの三里塚闘争になんとしても勝ちぬぎ、
三里塚闘争を中心とした広範な労働者の活性化を生
み出すこと、その中に八〇年代中期以降の大きな展
望が切り開かれることを確信します。

動労千葉は今までの日本の労働運動の常識を打ち
破って決起しました。組織人員の五割を動員しまし
た。

われわれは日本中の労働者に、労働組合の幹部に
いいたい。

やる気になればできるんだということを。今まで
不可能といわれたことを可能にしなければなりません。
そうしなければ、中曾根の激しい攻撃とたちむ
かうことはできないのです。

闘う労働者、農民を固く信頼し、一切合財をかけ
て闘うことを明らかにしてあいさつとします。